



さ さ き き よ と
佐々木 清登 さん

1929年11月25日生まれ

父を劇症型の水俣病で亡くしたことを契機に、被害者の救済を求めて、チッソ(株)との自主交渉に携わってきたことや、自身が水俣病の苦しみと闘ってきたことを語る。

1997年4月から水俣病資料館の「語り部」となる。

水俣病患者連合会長。

熊本県葦北郡芦北町女島在住。

私は1955年、26歳で結婚した当時から、関節が痛くなったりしびれたりして、おかしいなと思いながら、先祖代々から続く漁業一本の家業に従事していましたが、その時分から水銀に侵されておったのです。1956年長女が生まれましたが、身体の具合は悪くなるばかり…。しかし、それにかまっておられず仕事を続けるしかありませんでした。

1959年頃、水俣病が一般に知られるようになり、漁業補償を求める運動が始まりました。1959年11月の漁民騒動では、不知火海沿岸の漁民約2,000人がチッソ工場に押しかけました。もちろん、私も先頭にたって参加しました。その当時、私たち漁民の生活は言葉では言い表せないほどの苦しい状況でした。昔は大漁続きだった水俣湾に、異変が起こりだしていたからです。

その後、父に出ていた水俣病の症状も次第に重たくなり、最後にはあまりにも無残な死に方で亡くなっていきました。けいれんが起こり、やがてはひきつけとなり、もがき苦しみながら病院のベッドで暴れ続け、父はベッドに縛り付けておかんとどうしようもなくなってしまうました。そのような苦しみが百十日続いた後、父は死にました。水俣病の苦しみから、ようやく解放された瞬間でした。

しかし、そんな壮絶な父の死を目の当たりにした私は、原因企業チッソに対する本当の怒りを覚えました。その後、水俣病被害者救済の道に進み、チッソや行政と交渉を重ねてきました。

水俣病問題は深刻な健康被害をもたらしたばかりでなく、住民の絆を損なうなど甚大な影響を地域社会に及ぼしました。私はこのような悲惨な公害を決して繰り返してはならないという思いで、語りつづけています。

【写真；チッソや行政と交渉を重ねていた時代】